



◎1878（明治11）年設立の上田変則中学校が前身。上田藩主館跡に校地を有し、表御門を継承した校門は、堀・堀と共に上田市文化財に指定されている。2014年度、SGHアソシエイト校の指定を受け、「地球市民のリーダー」育成を推進している。

<b>設立</b>
1900(明治33)年
<b>形態</b>
全日制・定時制／普通科／共学
<b>生徒数</b>
1学年約320人
<b>2014年度入試合格実績(現浪計)</b>
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、信州大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大などに232人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、明治大、法政大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大などに延べ643人が合格。
<b>住所</b>
〒386-8715 長野県上田市大手1-4-32
<b>電話</b>
0268-22-0002
<b>Web Site</b>
<a href="http://www.nagano-c.ed.jp/ueda-hs/">http://www.nagano-c.ed.jp/ueda-hs/</a>

長野県  
上田高校

進学実績向上

# 生徒個々に応じた指導を 全校体制で徹底し 東京大合格者数を回復

変革のステップ

背景

◎2012年度入試から2年連続で東京大合格者ゼロ。同校の歴史生まれに見る事態に危機感を募らせる

STEP 1

実践

◎学校のミッションや生徒情報を共有して教師の意識変革を促し、生徒一人ひとりの課題に応じた手厚い面談、添削指導を実施

STEP 2

成果

◎2014年度入試で東京大理学学類に現役で3人が合格。国公立大合格者も過去5年で最高の実績を上げる

STEP 3

実力のある生徒の力を  
伸ばし切れない

2013年3月、東京大受験者が全員不合格だったと伝えられた瞬間、長野県上田高校の進路指導室は沈痛な空気に包まれた。東京大合格者ゼロという結果は前年に続くもので、過去十数年をさかのぼっても例がないことだった。

同校は、国公立大に毎年200人以上が合格する進学校だ。ただ、学校を取り巻く環境は、必ずしも恵まれてはいない。上田市の人口は近隣の長野市の半数以下と、子どもの数自体が少なく。更に、交通の便が良いことから、地域の成績最上位層の中には、徒歩圏の同校ではなく、長野市の進学校を選ぶ生徒もいる。そうした状況でも、旧帝大、国公立大の医学部医学科、早慶上智などの難関大・学部・学科への合格者数は、この数年、右肩上がりだった。それだけに、13年度入試の結果は、教師たちに「東京大に受ければ」という無念さをより一層感じさせた。

しかし、数字以上に教師に危機感を抱かせたのは、生徒たちが東京大に合格できる力を持ちながら、本番で実力を発揮できなかったことだ。特に、12年度の3年生には、入学時から十分に東京大を狙える学力を持つ生徒がいたのにもかかわらず、生徒の力を伸ばし切れなかった。名門復活に向けてすべきことは何か。教師たちは早急な対策を迫られた。

## 不振の原因究明と 教師の意識改革を推進

同校がまず取り組んだのは、不振の原因を明らかにすることだ。進路指導係が中心となった。当該学年の活動を検証したところ、浮き彫りになったのは、最上位層を伸ばそうという教師間の共通認識、意識の希薄さだった。進路指導主事の小岩井秀樹先生はこう話す。

『東京大合格』というミッションを明確にしていなかったことが、最大の原因だったと思います。責任の所在があいまいで、『東京大合格』に向けて何を仕掛けるかという明確な指針もなかったため、最後の最後で生徒が力を出し切ることが出来なかったのです』



長野県上田高校  
**小岩井秀樹** こいわい・ひでき  
教職歴35年。同校に赴任して8年目。進路指導主事。「女の馬車を星につなげ。Hitch your wagon to a star.」



長野県上田高校  
**小宮山勝人** こみやま・かつひと  
教職歴26年。同校に赴任して9年目。進路指導係教務SGHアシリエイト担当。「生徒にも、自分にも『やらずの後悔』をしないように心掛ける」



長野県上田高校  
**中村克** なかむら・かつら  
教職歴4年。同校に赴任して5年目。進路指導係教務科。「まずは、自分が楽しい授業をし、自分が楽しんで学校生活を送る」

生徒個々の学力データを分析すると、教科の学力バランスが悪く、英語に時間を掛け過ぎて数学が足を引っ張った、センター試験では高得点が取れているが、個別学力試験では点数が取れていないといった状況が明らかになった。

そうした課題を踏まえ、最初に着手したのは教師の意識改革だ。毎年5月、全校で実施する進路報告会が、教師の意思統一を行う最初の場として設定された。

報告会の目的は、前年の取り組みの振り返り、入試結果の総括だが、13年度は自校のデータだけでなく、他校の進学実績との比較、東京大・京大の入試改革の現状を示した。次に、事例研究として、東京大に合格できなかった生徒の模試結果を基に、不振の原因は教科の学力バランスの悪さであることを明らかにした。そして、『東京大合格者を毎年出す』というミッションを改めて確認し、教師の意識改革を促した。

報告会では初の試みとして、各教科担当の総括を行った。各教科の前3学年担当者が2〜3分ずつ、学年の指導方針や特徴的な取り組み、入試への対応などについて報告した。その狙いを、進路指導係の小宮山勝人先生はこう語る。

『学年ごとに教科の指導方針が変わり、指導の一貫性に欠けるのも本校の弱点でした。効果的な取り組みがあっても教師独自のノウハウにとどまり、次の学年に受け継がれないことが少なくありません。特に、13年度は多

くの教師が異動したため、ノウハウを公開して指導の連続性を担保する必要がありました』他教科の指導内容を知ることが、担任の指導にも良い影響を及ぼすと、数学科の中村克先生は指摘する。

『教科によってセンター試験対策や添削指導の時期は違います。英語が記述対策に重点を置いている時に、自分の教科の感覚で『今はセンター試験対策をした方がよい』などと指導してしまつたら生徒を混乱させるだけです。他教科の状況を知ることが、担任としても適切な指導が出来るようになりました』

## 「面接シート」で生徒個々の情報を共有し、課題に応じた指導を徹底

教師の意識改革と共に、生徒個々の課題に応じたきめ細かい指導にも力を入れた。

個に応じた指導を行うには、何より生徒把握が必要となる。そこで、13年度3年生で活用したのが「面接シート」だ（P.32図）。年度初めに東京大志望者を把握し（13年度は10人）、進路指導係が志望者と個々に面談を実施。各教科担当の名前、模試の結果、部活動、学習上の悩み、塾や通信添削講座の利用状況などを1枚のシートにまとめた。シートはデジタル化して校内LANのサーバーに入れ、教師が自由に閲覧できるようにした。

面接シート									
東大・理(一理工) 定数3年(+) 履(+) 著 氏名(O.H.) [〇〇中学校]									
国語		数学		理科		地理・公民		英語	
現代文	古文	A	B	C	D	E	F	G	H
		物理		化学		生物		英語探求	
		I		J		K		L	
校内での個人活用の状況									
実施教科		実作文							
担当者・内容		J							
学校に選ばれる理由									
将来の夢 物理というシステム全体の改善に携わりたい。物理・化学が面白いと思う。									
所属クラブ等 小学校 野球 中学校 野球 高校 軟式野球(引退)									
所属部活動等 小学校 会長 中学校 議長 高校 文化祭 理事									
通信活期									
名時(★)		現時点での達成感等について(満足に達しているか……)							
受講期間		高2まで、〇〇(今も、入っているが……)数学と英語							
受講科目		△△予備校=高3から、数学と理科							
受講科目		1月~ 受講科目							
受講科目		1月~ 受講科目							

「面接シート」の項目は、他に学習上の悩み、得意科目とその理由、不得意科目とその理由がある  
\* 同校の資料を抜粋して掲載

「担任だからこそ知っていること、教科担当が把握している情報などを、その生徒にかかわる全ての教師が共有し、全員で支援する体制を築こうとしました。学習状況や個人的な問題まで把握することで、やる気を高めるための確かな声掛けや連携が可能になると考えています」(小岩井先生)

難関大・医学部医学科志望者向けの模試添削指導も、生徒個別の課題に応じた指導だ。夏と秋に行う大学別模試の受験者のうち、希望者が受験後すぐに自分の解答用紙をコピーして教科担当に提出し、個別指導を受けるといふもの。「模試結果が返却されるまでの1か月間を

無駄にしたいくないという思いで始めました。コピーを取ることによって、生徒は「どうしてこういう解き方をしたのか」といった自分の考えが鮮明なうちに復習することが出来る、教科担当は生の答案を見て、数値だけでは分からない意外な弱点を見付けることが出来るようになりました」(小宮山先生)

きちんと理解していた上で正解できたのか、理解はあやふやだったかたまたま正解できたのかは、生の答案を見なければ分からない。理解が不十分な生徒には、過去問の類似問題を課すなど、生徒個々の課題に応じた指導をして弱点克服を促した。

### 「チーム医療」をキーワードに 教師一人ひとりの力を結集

生徒一人ひとりの課題に応じた指導を、同校では「チーム医療」に例えている。医師、看護師、放射線技師など、各分野の専門家が連携して治療に当たるように、管理職、各分掌、担任、教科担当が、それぞれの立場から生徒一人ひとりに焦点を当て、専門スキルを駆使して指導するというものだ。教科・進路・生徒指導のあらゆる側面から、生徒を支えていく体制が、学校教育には欠かせないという考え方が背景にある。

もちろん、教科や分掌の枠にとらわれていては、チームとはならない。教師全員がプロの教

師としての自覚を持ち、生徒にかかわろうとする意識を持つことが、同校の「チーム医療」の神髄である。

「進路指導は進路のプロがやればよい」という考えもありますが、生徒に毎日接し、面談をするのは担任です。進路指導係はデータの準備など、担任をサポートするのが役割です。全ての担任が進路指導のプロという意識で生徒にかかわることが、生徒一人ひとりの進路実現に欠かせない視点です」(小岩井先生)

3年次に6回行う志望校検討会の運営を、学年主体に切り替えたのは、担任団の主体性を引き出すためだ。それまで、資料の準備や進行は進路指導係が担当していたが、13年度から、各学年が主体的に運営していく形に変えた。必要なデータは、学年団が進路指導係に依頼して用意するようにした。司会進行も全て学年主体で行うことにより、学年団が一丸となって指導に向かう意識が醸成されているという。

### 低学年時からトップ集団づくり 学校全体を牽引する存在に

低学年時から難関大を意識させるための取り組みも、13年度に始めた。12月、1・2年生の希望者を対象に「難関大学ガイダンス」を実施し、進路指導係による講演、外部講師による進路講演会や教科の対策講座などのプログラムを

通して、難関大の情報を提供した。進学意識を高めるのが目的だが、真の狙いは「集団づくり」にあると、小岩井先生は明かす。

「本校の生徒は、人前で目立つような行動を取るのが苦手です。『東京大に行きたい』『医学部医学科を目指す』など、自分の進路希望を人前で言うことなどはありません。だからこそ、夢を語り合える雰囲気をつくり、高い目標に向かって切磋琢磨し合う集団が出来ればと思います。いずれは、学校全体を牽引するトップ集団になればと考えています」

ガイダンスの実施前には、担任に偏差値60以上の生徒に声を掛けてもらった。当初、担任団からは取り組みに対して否定的な意見もあったが、小岩井先生が取り組みの意義を粘り強く伝えることで担任も動き、1・2年生合わせて約140人が参加した。

また、毎年3月には、同校の同窓会館に外部講師を招いて「難関大学対策講義」を実施している。12月のガイダンス、3月の対策講義との相乗効果でトップ集団を形成し、2・3年生に向けて弾みを付けるといふ流れをつくるため、12月のガイダンスの内容を検討していく。

## グローバルな進路指導の可能性を模索する

全校一丸で進めた改革により、14年度の大学

入試の実績は目覚ましい回復を見せた。最大の懸案だった東京大には、理系学類に現役で3人が合格。国公立大全体でも過去5年間で最も多い232人が合格した。

今後の課題は、教師の異動によってノウハウが途絶えることのないよう、3年間を見通した指導ストーリーを構築することだ。長野県は教師の異動サイクルが短く、教師間の指導の平準化、ノウハウの継承は大きな課題だ。

2つめの課題は、地域の最上位層の生徒がより多く入学してくるよう、地域に同校の魅力が今以上にアピールしていくことだ。ここ数年、公開授業に合わせて年2回「小学生と保護者対象の学校紹介」を開催しているのも、その布石

の1つである。

3つめの課題は、14年度、スーパーグローバルハイスクール（SGH）のアソシエイト校としての実践だ。

「現段階ではSGHの取り組みそのものを模索中ですが、活動の中で東南アジアの医療について学んだことの影響もあってか、『医学部医学科に進みたい』『国連職員になりたい』という希望を語る生徒も現れています。今後は、本校から直接、海外の大学への進学を希望する生徒が出てくるかもしれません。国内の大学だけでなく、海外を視野に入れた進路指導のあり方も模索していきたいと考えています」（小岩井先生）

## 情熱 若手教師が語る、指導変革へ

### 初任者も1人の教師として 尊重する学校風土

進路指導係 中村 克

初任で本校に着任し、4年が過ぎました。この間、担任として、進路指導係として、さまざまなことに挑戦し、多くの経験を積んできました。

2013年度に3学年の担任となった時は、進路指導係の模試担当として、成績上位層向けの模試対策講座を担当しました。以前は模試の手順を説明するだけの場でしたが、せっかく生徒が時間を割いて集まるので、生徒の受験意欲を伸ばすような取り組みにしたいと考えました。模試に向けた心構えや、難関大攻略に必要な勉強法、入試本番に向けたストーリーなどについて語り、受験生としての心構えを持たせるように努めました。

私がアイデアを出し、良いと思ったことを実行できたのも、先輩方が私を新人として見るのではなく、1人の教師として尊重してくださったからです。私自身、ベテラン教師でも若手教師でも、生徒の前に出れば1人の教師に変わりはないということを常に意識して、生徒と接してきました。そういった私の気持ちを酌んで、意見を取り入れてくださったのだと思います。

長野県は異動サイクルが短いため、私も近いうちに他校に赴任すると思います。そこでは、中堅教師として指導に加わることになるでしょう。私が先輩方に育てていただいたように、私も若手の先生を1人の教師として尊重し、お互いに高め合い、率直に意見を言い合える関係を築いていきたいと思っています。